

## 第 1 回小田原市総合教育会議での主な意見

- 1 日時 平成 27 年 7 月 2 日 (木) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 00 分  
場所 小田原市役所 全員協議会室
  
- 2 出席者  
加藤 憲一 (市長)  
吉田 眞理  
栢 沼 行 雄 (教育長)  
萩原 美由紀 (教育委員長職務代理者)  
和田 重 宏 (教育委員長)  
山口 潤

### ○策定する大綱のイメージ、策定プロセス

- ・ 大綱のヴォリュームとして A4 の紙にして、2～3 枚程度のイメージを持っている。
- ・ 本市の教育行政の方向性が分かりやすく示せるように取りまとめをしたい。
- ・ あまり抽象的で簡略化しすぎず、あまり具体的すぎない内容としたい。
- ・ オール小田原で子どもたちの育ち、学びの環境の在り方、子どもたちが育ってほしい人間像、それを支える社会像などを含め、広範な議論をしながら小田原の教育のあるべき姿を考えていきたい。
- ・ 教育大綱は、子どもたちのために一義的につくるものだが、そこに書かれるエッセンスやハートの部分は都市イメージの発信にも直結していけるようなものになると良い。
- ・ 教育大綱も、健やかな育ちが出来るまちであるというイメージが下敷きになっていくように取りまとめられると非常に良いと思う。
- ・ 少子高齢化や教育行政に割ける財政的な資源も全体的には減っていく中で、一人ひとりの問題の解決能力がこれまで以上に高くなっていかなければ、これからの地域社会の課題を背負って行けない。
- ・ もって生まれた能力も様々であり、色々な諸条件がある中で、必ずしも一つの社会的な像に結実は出来ないと思うが、少なくとも教育の大綱である以上は、教育の結果、育った結果として、どんな人間になってほしいのか、どんな人として育ててほしいのか、目標は何らかのかたちで掲げていくべきだろう。

### ○義務教育後の教育活動

- ・ 20 代、30 代の引きこもりやニートの支援をしていると、手遅れではないかという感じを抱く。成長発達の段階で、時期を得た対応が出来たら良い。
- ・ それぞれの年齢において、家庭・地域・学校の人たちが何をすべきか、何が出来るのかをきちんと社会的に共有していくことがとても大事なことであり、それは大綱の策定が終わったとしても、引き続き、別の作業として、まとめていくべき事ではないか。この

総合教育会議のミッションとして考えていっても良いかと思う。

### ○自立した大人を育てる

- ・ 市が取り組んでいる教育委員会の仕事は、義務教育が主体であるが、首長が総合教育の視点で立案されていくのであれば、義務教育までではなく、その後の年齢の人たち、自立した大人を育てていくという視点が必要なのではないか。
- ・ 目標をどこに置くか、どうしても目先の学力と進学というところに目が行きがちだが、もう少し広い視点で、子どもたちにどんな大人になってもらいたいのかというイメージが湧くようなことが掲げられるといい。
- ・ 大綱の策定では、小田原市の教育が目指す方向性をかなり明確にしたら良いのではないか。例えばフィンランドの教育では、優れた納税者を育てるということを教育の目標に掲げている。

### ○雇用政策との連携

- ・ 若者の就労支援活動をしていると、大学を卒業して正規雇用が付いた人たちが、早期離職する割合がものすごく高いことがわかる。2014年度の10月に発表された数字では、3年後に32.6%が早期離職し、経済的困難者に陥っている。
- ・ 教育の最終的な出口は、雇用にあるべきである。残念ながらこれが無い。学力だけはあるけれども、継続して働く力が身に付いていないという現状を見ると、やはり出口のところに、雇用政策が必要だろう。
- ・ 県西地域の公立高校は養護学校も入れて9校あるが、ここを卒業した子どもが、なかなか地元で就職しきれない状況がある。企業側のアプローチも弱かったり、高校側の理解も浅かったりして、マッチングが出来ていなかった。産業政策課が高校生の進路について今一生懸命取り組んでいるので、大綱の中にも組織の繋がりとして入ってくるべき。

### ○地域にしっかりと根をはる

- ・ しっかりと体に見合った根を張っていかなければ、健やかな樹木には育たない。
- ・ 学びの原点である学校教育においては、家庭力の低下などから、この根がなかなか育ちにくい状況がある。それを補うためにも、学校では地域の力、市民の力を借りながら、この健やかで伸びやかな根をしっかりと張っていくという部分が必要ではないか。

### ○生きる力（学校教育振興基本計画の目指すもの）とは

- ・ 「生きる力」とは、これから変化の激しい社会を担っていく子どもたちに最も必要な力、身につけさせたい力である。
- ・ 子どもが育っていく中で、様々な人間関係との関わり、新たなまちづくりの動き、人づくりに関する取組みなど、新しい視点からの風（新しい風）を受けながら、子どもたちが伸びやかに育ってもらいたい。
- ・ 学校教育、その前提となる家庭の教育、それら双方を支えていく地域の在り方、様々な

まちづくりや人づくりの活動、こうしたものが一体となって、一人の人間である子どもたちが健全に育っていく姿というものを作っていきたい。

- ・ 「生きる力」を支える重要な要素は知・徳・体である。つまり、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」であり、この3つの力が調和して、最終的に「生きる力」となる。

## ○「3つの心と3つの力を持った 未来を拓くたくましい子ども」について

### (1) 確かな学力とは

- ・ 基礎・基本をしっかり身につけて、いかに社会が変化しようと自ら課題を見つけ、自ら学び、そして考え、主体的に判断し行動していく、その中でよりよく問題を解決する、こうした資質、能力 生きる土台としての「確かな学力」と捉えている。
- ・ 従来は学力というと、とかく知識、理解だけが中心となって、他の要素というのは比較的付随するものというような見られ方だったが、現在の学力観は4つがバランスよく備わっていることをいう。
- ・ 小田原の子どもたちの今後課題は学習意欲の部分だろう。周囲の大人が学習意欲づくりをどのように喚起していくかが課題である。
- ・ 自ら考えて、自分で判断し、そして行動できる思考力、判断力、この力が弱っている。

### (2) 豊かな心とは

- ・ 「豊かな心」は、自らを律し、他人と共に協調し、或いは他人を思いやる心、感動する心、こういった豊かな人間性のことである。
- ・ 小田原の子どもたちに、これからさらに身につけさせたい力として、コミュニケーション能力がある。

### (3) 元気な心と健やかな体とは

- ・ 「健やかな体」とは、逞しく生きるための、健康とか体力のこと。特に健康、体力については、家庭の力が非常に必要となってくる。基本的な生活習慣が確立していないという子どもたち、これをまず立て直していく必要がある。それには家庭、地域の力が不可欠である。
- ・ 体力も最近弱ってきているというデータからも、これからはスポーツ或いは運動を通じた、子どもたちの体力の向上も今後の課題となってくる。
- ・ 小田原で積極的に進めている食育ファームや、食に関する教育も、健康には欠かせない部分である。
- ・ 「元気な心と健やかな体」ということで、学力と心と体、これを「生きる力」の三要素と考えている。

### (4) 郷土を愛し、大切にしたいとは

- ・ 郷土を愛し大切にしたいを備えた子どもの育成も小田原ならではの教育スタイルである。

### (5) おだわらっ子の約束の実践とは

- ・ 「おだわらっ子の約束」を実践できる子どもの育成を掲げて、生きる力を全体的に育むということを小田原の教育の根幹に位置づけ、未来を拓くたくましい子どもの育成を目

指そうとしている。

### ○人間としての本来的な欲望の減退

- ・ 東京都の幼稚園、小学校、中学校、高校の児童生徒の性に関する調査は、3年毎に中学3年生を対象に実施しているが、「あなたは今まで性的接触をしたいと思いますか。」という質問に対し、1987年では男子生徒の86%、約90%が「関心がある」と答えていたが、昨年度になると、約25%になっている。女子については、2014年度で10.9%しか関心が無い。90%近い人たちが、「関心がない」と言っている。人間としての本来的な欲望が相当減退していると言わざるを得ない。これを教育の大綱の中に何らかの形で盛り込んでいきたい。
- ・ 生きる力が非常に少なくなってきた。不登校・引きこもりが長期化すると必ず陥るところが家庭内暴力だったが、今は、殆ど聞かない。その力が無くなっている。飛躍した意見だが、今、暴走族を募集するのに大変だと聞く。それだけ生きる力が低下している。

### ○地域コミュニティ、様々な大人が子どもを育てる

- ・ 子どもが育っていくまでに、先生以外の人たち、関わってほしい人たちをどう繋げていくか。PTAはもちろん、それ以外のコミュニティの人たちが、自分の子ではないけれど、地域の子だと見てくださって、注意するときは注意してもらおう。そういう間柄、顔の見えるコミュニティが出来ないか。
- ・ 教育に関わる人たちだけではなくて、家庭も地域の人たちも共にこれを共有していかないと、恐らく我々が目指すところの大綱の中身になっていかないだろう。
- ・ 本質的に子どもの育ちは社会的なものなので、色々な人と関わるという機会がないと、子どもの「豊かな心」とか「元気な心」は育たない。
- ・ 放課後子ども教室、放課後子どもの総合プランを導入する際は、地域の大人を小学校に連れてくるのではなくて、子どもたちを地域へ出して行って、子どもに関心がない大人も子どもに関わる。子どもにとっても、自分で冒険もできるような場や機会を設定していくというように、子どもの生活全体を考えれば、子どもが強く育ち、生活力を得ていくのではないか。
- ・ 体験活動として地域に連れて行くような体験プログラムとか交流プログラム、そういう中で地域の外に出てというようなことを希望しているのではないか。何でも安心・安全で囲ってしまって、その中で子育て・教育をしようとするのは、本来の姿ではない。育つものが育たない。
- ・ 都市化につれて子どもが危険にさらされる分、過保護になってしまうが、小田原市はまだ間に合う気がする。
- ・ 子どもの能動的な力を育てるためには、子どもが大人や地域に支えられるだけではなく、子どもも参画して地域を作っていくような、相互に力を出し合うイメージがあると、地域の中で子どもが色々な役立つ経験を通じて、育っていくというイメージが出来てくる。

## ○学校と地域等との対等な関係づくり

- ・ 地域から一方的に学校に物申すだけではなくて、学校も地域に対してより開くことによって、地域を支え、励ましていくような、相互にメリットのある状況を出来るだけ早く市内全域に広げていきたい。
- ・ 地域と学校の在り方で、一番大事なことは、やはり対等な関係であることを明確にするというのが必要ではないか。どうしても従来型の学校主導型に住民がサポートに入るという関係がもう何十年も続いているが、この意識改革が学校にも必要だし、地域住民にも必要なことだと思う。今回の大綱で意識改革に持っていけるかが重要な成否を分けるものとなる。
- ・ 地域の子どもを地域と学校が共に育てるが、学校教育の特性が薄められるようなことがあってはならない。
- ・ 学校が提供しうる空間としての機能もあれば、そこを使ってより発展できそうな地域側の活動もたくさんあるので、これらが上手く、相互に負担にならないようなことも大事である。
- ・ コミュニティスクールの中で学校と家庭と地域とが対等の関係で、今後、学校運営協議会を含めて、おそらく学校が様変わりしてくると思う。その中で地域の課題、青少年を巡る課題を共有して、「地域では、家庭では、学校では」というようなかたちでコミュニティの運営協議会の中で、三者がお互いに協働し、連携して課題を解決していくことが大きな役割だ。
- ・ 教育現場に地域の方が入り込んで、学校を支えるということだけではなくて、学校と地域が連携することで、地域の側もまたそれで豊かになっていく、活況を帯びていく、双方向の取組みをしていこうという考えがある。

## ○小田原の持つ多様性を教育に活かす

- ・ 小田原は従来からお城、提灯、干物に梅干にかまぼこというイメージだったが、実際には本当に多様であり、これから育っていく子どもたちや若い親御さんたちとか、非常に魅力的な生活環境とか空間とか文化とか生業が、非常に満ち満ちている。
- ・ 東京からとても近く、これだけの自然があって、環境として素晴らしいので、そこが魅力で小田原に勤めている人たちがいる。とても魅力深いところで、地の利も良いので、人口が増えないのが不思議な気がする。
- ・ 小田原の特色をどうやって活かすかと言われたときに、海があって山があってというところで何かできればいいなと思う。
- ・ 海沿いの小学校は、海業に近い。また、ある小学校では農業に近い、林業に近いなど、生業がまわりにふんだんにあるところもある。こうした色々な特徴を持っている学校が、お互いに交流したり、学びあったりすることによって、より多様な育ちの場が出来てくるのではないか。これは、非常に重要な小田原の特性であり、可能性ではないか。
- ・ 学校同士の交流という事だけではなく、学校が存在する地域同士の交流にもなっていく

可能性がある。こうしたことで、小田原全体が豊穡な森・豊饒な海になっていけないのではないか。

- ・ 小学校によってそれぞれ特徴があるので、その学区外の学校ではどのようなことをしているのか子どもたちが学べるような姉妹校を作っていく。こうした関係づくりを小さいときに出来れば、視野も広がり、色々な経験の共有が出来る。
- ・ 山側の学校と海側の学校が交流するというのを是非やっていただきたい。
- ・ 学校毎に立地も得意分野も特色もそれぞれ異なるので、それらを活かしながら機能分けしていくということは、今後の議論が必要だろう。
- ・ 小田原というのは本当に多様な地域性を持っている。歴史、伝統、文化、これがそれぞれの地域にあり、町並みも違う。産業構造も住民の気質、文化も少しずつ違う。こういった地域の差というものを「多様性」ということで捉えなおしていくと、これらをお互いに、小田原全体として、育ちの場の豊かさとして活かしていけるのではないかと。
- ・ 学校のICT関係への投資により、学校毎に情報発信が出来るようになり、各校HPを持っている。日々の給食の内容から何から、基本的な発信ができていますので、学校の特色が見えやすくなってきたという状況がある。

### ○「新しい風」とは

- ・ 「新しい風」というものが、教育の中で非常に重要だ。例えば、他の市・町から転居してきて、転入した場合、子どもたちが自分と異なる世界の人を素直に受け入れることになる。何か「新しい風」を非常に心地よく受け止めるような人づくり、児童・生徒づくりに取組めたら良い。
- ・ 「新しい風」が吹くことで、木の葉が落ち、肥料となり、土となって、木が育つ。「新しい風」による好循環するイメージを感じる。
- ・ 「新しい風」（心地よい風）により、教育や子どもの中にある、外からを排除し、自分たちの世界だけで生きていこうという傾向、仲間外れ等が変わっていったら良い。
- ・ 昔は地域でも、転入者を「よそ者、よそ者」として全部はじいて、昔から育った者だけのコミュニティをつくっていったという流れがあったが、子どもたちの社会にも当時、同様なことがあったのかと思う。今はそういったことがきっかけで、いじめに発展したり、阻害されたりということがある。

### ○教育をとりまく環境

- ・ 本市でも人口の減少が進み、現在 194,000 人前後だが、国の推計によると、2040 年には人口が 158,000 人にまで減少するといわれている。また、20 代から 30 代前半では、人口の流出の方が増えている、流出超過の状況であり、主に近隣の都市部、東京の方に流出している状況がある。
- ・ 小田原は、恵まれた環境にあるので、子育て世代が都市部から流入してほしいと思っているが、なかなか、そういうところには至っていない。
- ・ 現在、公立の幼稚園が 6 園、小学校が 25 校、公立中学校が 11 校あるが、子どもの数を

考えていくと、縮小や統廃合が必要な状況にも直面しかねない。

### ○地域とともにある学校のあり方

- ・ 基本的に小学校というのは人数が減ったとしても、地域の重要な核であるため、存続させていくべきだという想いがある。
- ・ 小田原市では地域のコミュニティの核が小学校であり、スクールコミュニティを打ち出し、小学校に色々な地域のコミュニティの拠点を抱かせていこうという構想もある。
- ・ 老朽化した支所等は学校に統合していくという考え方も持って、色々なプランの検討を行っている。
- ・ 地域の側からすると、学校というものの自体の価値が、子どもが育っていく場プラス地域の核という意味合いも持っていくだろう。
- ・ 小田原では、25ある小学校区は、連合自治会区（26地区）とほぼ等しい。小学校区を地域コミュニティの拠点、人と人を繋ぐ場に位置づけし直すという想いをかなり持っている。
- ・ 学校と地域の関わりをベースにした地域づくりが、非常に重要になってきている。これにより、子どもたちの育成環境がより確かなものになっていく。
- ・ 地域の拠点であり、学びの拠点でもある学校が地域の中で生きていく。その学校を核にして、様々な活動が行き交うような取組みを目指していきたい。
- ・ 地域には色々な活動があるが、それをバラバラにそれぞれの団体がやっているということではなく、これらが統合するかたちで生きていくと、相当な力が出ていくと思う。
- ・ 学校という施設が教育の場だけの施設ではなくて、今後は地域の拠点としての施設という考え方でいかなければならない。学校の周辺には、保育園や幼稚園、老人ホームなどもあるが、自治会を含めた地域の拠点、拠り所として、学校施設の在り方は、今後変わっていかねばいけないだろう。
- ・ 学校に、保育園や幼稚園を持ってきたり、老人ホームを持ってきたり、福祉的な施設を持って来るなど、複合的で多機能化していく、そんな学校施設も今後は当然必要になってくるだろう。
- ・ 小学校に認定子ども園を入れていくことは必要ではないか。
- ・ 小学校区が地域の拠点というのは、素晴らしい考え方だと思う。高齢者や障がいがある方にとっては、小学校区ぐらいが一番生活圏として利用しやすい。老朽化した支所等を学校に持って行って、ワンストップで色々なことが出来て、活動も出来るというような場が地域にあれば、地域が活性化すると思う。
- ・ 差別解消法等で公立の幼稚園、公立の子ども園等に障がい児が増えているが、障がい児の今後はどうなるかは、親としても少し心配だ。小学校と特別支援級を併設すれば、身近に自分たちの子どもの小学校に通う姿や育ちが確認できる。小学生へ向けた子どもの育ちを親も少し長い目で見ながら、子育てが出来る。将来的に幼・保・小一体校みたいなものは是非あってほしい。

## ○中学校区の考え方

- ・ 中学校区を一つのエリアとして、小学校区はもちろん温存させながら、拠点となる小学校を決め、拠点となる小学校には、拠点的な地域の機能を持たせる。もし統廃合が起こったときに、なんらかの支援が出来て、たとえば低学年の子は地域の小学校に行くが、高学年は拠点校に通う等、色々な運用が出来ると思う。

## ○中学校における取組み

- ・ 中学校或いは中学生を視野に入れた取組みは、小学校に比べてちょっと弱い部分である。
- ・ 中学生で部活等をしていない人や学習支援が必要な方たちが勉強する場として、放課後の教室を開ける事も出来るのではないか。

## ○自由学区制のような考え方

- ・ 小田原に住むメリットとして、もっと海の方の学校にとか、農村地帯の方の学校に子どもを通わせたいという希望もあったりすると、多少遠くても自然の豊かなところに通わせられれば、こちらに住みたいと思うお宅はあるのではないか。
- ・ 自由に小学校が選べる、選びたいと思えば選べるという環境があれば、親にとってはとても理想的な生活が得られるのではないか。
- ・ 地域が個性的であればあるほど、そこに馴染めない人は辛いということが起こってくることもある。学校に合わない感じがこじれる前に、縛りが少し弱くなって、比較的自由に学校異動できるようになればいいなと思う。
- ・ 学校の選択の自由度が上がり過ぎても、地域コミュニティとの関係もあるので、適度のバランスが必要かと思う。今後、議論が必要だろう。

## ○青少年問題への取組み

- ・ 青少年問題協議会は、現代の課題を解決できるような組織改革が必要ではないか。青少年問題協議会の会長は市長であり、十分に手を付けていかなければいけない。今回の機会に学校運営協議会や、全市的な横の連携が出来るような組織によって、教育交流と地域交流が活性化するのではないかと思う。そういう組織を新たに作る必要があるのではないか。
- ・ 現在の子どもや青少年の現状についての課題や問題へのアプローチについては、直接的には触れていないが、その裏側には色々な問題がある。しっかり向き合っていく体制をつくっていくという事について、触れられればと思う。
- ・ 子どもたちや青少年の成育を巡る課題に対する基本的な向き合い方のスタンス、視点について触れていかなければならない。

## ○障がい者への対応

- ・ 障がいがあることで中々外に出られない人たちが多く。そういう方たちを地域で支えるという意識があって欲しい。障がいがあっても無くても、同じ場所で必要とされる存在



であるということをお大綱に載せていただきたい。

### ○放課後子ども総合プラン

- ・ 国が出している「放課後子ども総合プラン」では、小学生は1年から6年までで、共働き世帯であるかないかに関わらず、子どもは放課後子ども教室と放課後児童クラブの合体したようなものが出来るので、放課後の居場所がある。放課後児童クラブに入っている共働き家庭は、19時までいられるという形で、子どもたちが小学校にいれば安全に育つだろうという考え方が根底にある。

### ○新玉小の学校運営協議会

- ・ 今年度から小田原市では新玉小学校をモデルにして、コミュニティスクールという制度を導入する。これまでも小学校の運営に地域の方が色々な形で、ボランティアでコミットして応援をしてきたが、より明確に法の制度に基づいて、学校運営協議会というものをつくり、学校の経営に色々な意味で参画していこうと取り組んでいる。
- ・ 新玉小学校で学校運営協議会に取り組むのであれば、正に試金石になるので、地域の方々の意識がこれによってどう変わっていくか、注意深く見ながら、参考にして施策をつくっていくことが大事である。